巻頭エッセイ

介助犬とのコミュニケーション

木村佳友　Kimura Yoshitomo

私は15年前の交通事故で頸髄を損傷し車いすの生活となった。8年前から介助犬のシンシアと生活している。介助犬とは，落したものや指示したものをくわえて渡す，ドアを開けるなど，身体の不自由な人の手足となって，介助作業をするように特別な訓練を受けた犬のことである。

介助犬への指示（動詞）には，英語の単語が使われる。英語の方が日本語より短く簡潔な単語が多く，犬が理解しやすいことなどが理由だ。日本語でも，簡潔な単語を用いることは可能だが，「伏せ」「待て」「取れ」など，厳しい口調の命令語になってしまうので用いられていない。ただ，名詞まで英語にすると，使用者が大変なので，「テイク・しんぶん」「オープン・れいぞうこ」のように指示する。当然だが，犬は，英語と日本語を区別しているわけではない。

では，どのようにして指示語を覚えるのか？

最初に覚えさせる言葉は「グッド（good）」である。これは犬に，「今，行っている動作が，正しいのかどうか」を伝えるために非常に重要な単語だ。トレーナーは，犬が正しい動作ができる状況を準備し，うまくできたら「グッド，グッド」と満面の笑みで褒め，精一杯のスキンシップをとる。具体的には，犬とひもを引っ張り合って遊ぶときなどに，犬がひもをくわえて引っ張ったら「グッド，グッド」と褒める。訓練の初期段階では，「グッド」と声をかけ褒めると同時に，ご褒美におやつをあげることもある。そのことで，犬は「グッド」が，楽しいこと，嬉しいことにつながるサインとして理解するようになる。

このような訓練法は，陽性強化法とも言われている。「グッド」を理解できたら，次の段階に進む。トレーナーは，犬の行動を観察し，犬の自然な行動にあわせて声をかける。犬が座れば「グッド，シット」，床に転がっているボールをくわえたら「グッド，テイク」という具合だ。一ヶ月も経つと，犬は楽しみながら，約60の単語を覚える。盲導犬や介助犬は，軍隊式のさぞかし厳しい訓練を受けていると思っている人が少なくない。私自身もシンシアの訓練を見るまでは，そう思っていたからしかたがないが，実際はそうではない。褒められることが嬉しくて仕事をするように訓練する。介助犬は，遊びの延長として仕事をしている。もし，トレーナーに叩かれたり，怒られることが怖くて仕事をするように訓練したのでは，犬を押さえつけることのできない障害者には，介助犬をコントロールできない。障害者が介助犬に介助をしてもらうために，毎回厳しい口調で指示しなければならないのであれば，精神的なストレスにもつながる。また，障害者は介助犬に仕事をしてもらうだけでなく，散歩に行ったり，ブラッシングをかけたり，介助犬の世話もすることで信頼関係を築いているのだ。ギブ・アンド・テイクの関係だ。

私は，シンシアとの生活を通じて，人と人だけでなく，人と犬のコミュニケーションにも，相手を思いやる気持ちが大切だと実感している。

きむら　よしとも
大阪市出身。日本介助犬アカデミー理事。コンピュータプログラマー。仕事の傍ら，講演や行政への働きかけを通じ，介助犬の普及活動に取り組んでいる。厚生労働省「介助犬の訓練基準に関する検討会」委員を務めるなど，身体障害者補助犬法の成立にも尽力。著書に『介助犬シンシア』（新潮文庫）など。2003年5月には「シンシア～介助犬誕生ものがたり」としてテレビドラマ化。